対人コミュニケーションにおける視線の役割

—視線と対人距離の関係—

○王 翼・宇津木成介

(神戸大学大学院国際文化学研究所)

キーワード: 視線・対人距離・記憶テスト

Yi WANG and Narisuke UTSUKI

(Kobe University Graduate school of Intercultural studies)

Key words: eye contact, interpersonal distance, memory test

目 的

Argyle & Dean (1965) は視線行動があるほど、対人距離が遠くなることを示した(親和葛藤理論)。Bailensonら(2001)は仮想現実空間にいるエージェントを用いて、参加者の対人距離を調べた。実験は、より人間らしいエージェントに対して、対人距離が遠くなることを示したが、凝視レベルに応じた対人距離の変化については明らかにしていない。そこで、実験1では、人物のリアリティーを操作し、実験2では、凝視レベル条件を加えて検証した。

実験1 方 法

実験参加者は男女大学生及び大学院生20名である。刺激は4種類でそれぞれ「人物の等身大全身写真」、「サインペンで描いた顔」、「顔なし」、「人間の形の厚紙」である。4つの刺激写真の額の部分に8桁の記号を貼り付けた。コントロール条件は実験室のドアを用いた。参加者には記号を覚えるよう教示し、刺激写真に接近させる。距離はビデオカメラで記録し、ビデオ記録を用いて測る。刺激写真の提示順はランダムで、参加者はそれぞれ5つの試行を行った。すべての試行が終わってから、記憶テストを行った。

実験1 結 果

参加者が刺激に接近して停止した後、参加者の顔面と刺激の間の距離を計測した。上体が前後に動くため、最短距離と最長距離を記録した。最短距離について、5つの刺激条件を分散分析(ANOVA)を行ったところ、有意傾向が見られた($F(4, 76)=2.1, p<0.1$)。TukeyのHSD法による下位検定では、5つの条件の間に有意差は見られなかった。最長距離について、分散分析(ANOVA)を行ったところ有意差が見られた($F(4, 76)=3.1, p<0.05$)。TukeyのHSD法による下位検定の結果、「顔なし」と「手書き」2つの条件がそれぞれ「全体写真」との間に有意差が見られた($p<0.05$)。コントロール条件のドアと人間の形の厚紙はほかの3つの条件の間に有意差が見られなかった。記憶テストの結果について、5つ条件の誤答数を比較した。 χ^2 検定の結果、5つの条件の誤答数に有意差が認められなかった($\chi^2(4)=2.828, p>0.05$)。「全体写真」条件では、誤答数が一番多かったが、「紙」条件と同数であった。「ドア」条件では誤答は最も少なかった。

実験2 方 法

実験2の手続きは実験1とほぼ同じであるが、実験1の刺激写真に基づいて、凝視レベル条件を加えた。刺激写真は「閉眼」、「左向視線」、「右向視線」、「正視」、「瞬目」の5つである。写真の額の部分に8桁の記号を貼り付けた。コントロール条件として実験1の「顔なし」を用いた。また、記憶テストは1つの試行の直後に行った。

実験2 結 果

最短距離と最長距離2つのデータを分析した。最短距離について、凝視行動レベルの分散分析(ANOVA)を行ったところ、

有意差が見られた($F(5, 95)=3.77, p<0.01$)。TukeyのHSD法による下位検定の結果、「顔なし」と「閉眼」、「左向」、「正視」の間に有意差があった($p<0.01$)。「右向」と「瞬目」の2つの条件はほかの条件との間に有意差はなかった。最長距離では、6つの凝視行動レベルの分散分析(ANOVA)の結果、有意差が見られた。($F(5, 95)=4.89, p<0.01$)。TukeyのHSDによる下位検定の結果は「顔なし」とその以外の5つの条件の間には有意差があった($p<0.01$)。ほかの5つの条件の間には有意差がなかった。記憶テストについて、6つの条件の誤答数を分析した。 χ^2 検定の結果、6つの条件の誤答数に有意差が認められた($\chi^2(5)=17.955, p<0.01$)。「瞬目」は誤答数が一番多かった。それに次いで、「左向」の誤答数が多かった。一方、「閉眼」は誤答数が一番少なかった。

考 察

実験1では、最短距離と最長距離の平均値はすべて「全身写真」条件でもっとも大きかった。最短距離ではすべての条件の間に有意差がなかったが、最長距離では「顔なし」、「手書き」が「全体写真」との間に有意差があった。この3つの条件においては、よりリアリティーの高い条件ほど対人距離が遠いという仮説が支持された。記憶テストの誤答数について、人物のいない条件では誤答が少なかった。

実験2の最短距離では、コントロール条件の「顔なし」の対人距離が一番短く、仮説通りであった。しかし、「瞬目」条件の距離は「正視」条件の距離より短く、仮説と異なった。その原因は、瞬目条件では記憶課題の誤答数が多かったことから、瞬目行動は記憶に邪魔になり、参加者は記号をはっきり覚えるために、刺激に近づいた可能性がある。最長距離の平均値から見ると、コントロール条件の対人距離が一番短く、仮説どおりであった。「閉眼」条件の平均値が一番大きかった。この結果は先行研究とまったく異なっている。その原因について、さらに検討する必要がある。「閉眼」条件の人物写真に対して、印象評価を行う必要がある。

コントロール条件よりリアリティーの高い条件において対人距離は遠くなることが示された。しかし、凝視行動レベルの効果は認められなかった。再生テストの誤答数について、凝視行動レベルの低い条件より高い条件のほうは誤答数が多かった。「瞬目」の誤答数は一番多かった。しかし、「左向」条件の誤答数も多かった。瞬目、左右視線の視線行動はパーソナルスペースとの関係はないが、認知的な処理に影響があるかもしれない。

引用文献

- Argyle, M., & Dean, J. (1965). Eye-contact, distance and affiliation. *Sociometry*, 28, 289-304
- Bailenson, J. N. et al. (2001). Equilibrium Theory Revisited: Mutual Gaze and Personal Space in Virtual Environments. *Massachusetts Institute of Technology*, Vol. 10, No. 6, 583-598